

全3回エッセイ
～Vol.2～

China

Japan

アフガン難民の 中村 哲
診療に携わる医師

アフガニスタンで 考える ～子育て～

最近日本では、束縛されるのを嫌がって子どもを生まない家庭が増え、少子化が進んでいるそうである。自分の自由を求める気持ちは分らないでもない。子どもは可愛い、やはり物心両面で手がかかる。何を隠そう、わが家でも子どもの支出が群を抜いてトップである。学資、習い事などで多額を支出する。

私は大家族への郷愁があった、子沢山に恵まれたのは嬉しいが、還暦も近いというのに、なかなか悠々自適の生活に入ることができない。家内の家事仕事も一向に減る気配がない。決して子どもが悪いというわけではない。銘々の生活リズムの中で、お家中心の気風と精神生活が失われたからである。「大きくなると親の負担が減る」という期待は、もう古くさくなったのだ。

アフガニスタンに戻ると、古巣に帰ってきたようで、何だかホッとすする。子ども



が野外で群れて遊んでいる。遊ぶだけでなく、よく働く。バザールで店番をしたり、自転車店で慣れた手つきでパンクの修理をするのも子どもだ。村では農作業の風景に必ず子どもがいる。

林業を営むヌーリストン

の山中で、面白い光景に出くわしたことがある。薪拾いは女の役目で、黒い民族服に身を包んで籠を背負って歩く。女の子もついていく。ところが、年寄りから各年齢の子が全く同じ姿なのだ。幼い子が、まるで大人の人

Afghanistan

India

形のようなだ。大人の籠は高さ1mほど、10才前後は60cm、5才前後は30cmと、体のサイズに合わせて小さくなる。担いでいる木の枝の束を見ると、これまた太さがだんだん小さくなり、幼い子はまるで割り箸の束のような可愛い小枝である。ここでは私たちが考えるような「おとな・子ども」の区別がない。子どもも重要な生産の担い手である。

PMS(ペシャワール会医療サービス)の作業現場でも、中学生ほどの子どもがダンプカーに同乗している。尋ねると父親についてきたそうで、時々親に代わって運転している。上手な重機の運転手は、たいてい子どもの頃から習い覚えた職人である。「親方」や「親分」とはよく言ったもので、実の子でなくとも、弟子入りして技術を覚える小さな助手に対して、お師匠さんはよく面倒を見る。こうして、子どもたちは親を、技術的にも精神的にも「自分を育て

一人前にしてくれる存在」として絶対の尊敬を置く。

これが社会全体の気風になっていて、父母、年寄り、親方などは目上の存在として大切にされる。白髪頭の私が少し重い石を転がしていると、見知らぬ若い作業員が飛んできて、「トラ(おじちゃん)、俺がする」と当然のように手伝う。接客な子どもも出てきて、驚くほど応対がきちんとして、成熟している。

旧約聖書のモーセの十戒に、「汝の父母を敬え」という教えが初めの方に出てくる。これは日本の昔も同じで、親は絶対的な存在だった。私も父母に逆らった記憶がない。風呂たき、薪割り、水汲み、茶碗洗い、掃除などは子どもの役目だったし、苦痛だと思ったことはなかった。一度だけ、受験の前日に、筆筒の移動を頼まれて断った。すると父が「親の手伝いもしない者は、学問の資格がない。進学なんかするな!」と、激怒したことがある。そ

れでも親を恨まなかった。借金をしてまで医学校を卒業させてくれた親に感謝している。当然、今のような福祉社会ではなかったから、老後の親の面倒は見た。義務というよりは、「そんなものだった」のである。

現地に戻ると、波長が合うと言うべきか、何となく人の温もりに懐かしさを感じるのは、日本社会全体から「一家の中の親と子」という関係が薄くなってきたからなのだろう。利害や理屈ぬきで温かい人の関係の原型が、親子なのだ。私はアフガニスタンで、水路作業現場の親方であることに、十分満足している。「自分」には様々な者がいて、中には厄介者や乱暴者もいるけれど、身内の子どもと思えば憎めない。



【なかむら・てつ】

1946年福岡市生まれ。九州大学医学部卒。ペシャワール会現地代表PMS(ペシャワール会医療サービス)総院長。神経内科(現地では内科・外科もこなす)。1984年パキスタン北西辺境州の州都のペシャワールに赴任。ハンセン病を中心としたアフガン難民の診療に携わる。4児の父。

【著書】『ペシャワールにて』、『ダラエ・ヌールへの道』、『医は国境を越えて』、『医者井戸を掘る』、『辺境で診る辺境から見る』(石風社)ほか

子どもは大切に育て、次の時代の担い手を育てるのが親の義務であろう。動物たちでさえそうしている。それは必ずしも「個人の自由や権利」とは関係ない。未熟な子を人間として一人前の「社会人」にすることだ。そのためには、親が未熟であってはならない。教育とは学歴を高くすることもでない。帰国してからも抵抗を覚えるのは、これだけ「子どもの人権」が取りざたされながら、子どもに対する犯罪、親に対する犯罪が絶えないことである。育てる側が、徒に権利や人権、個人主義で解決を図らず、親子の本源的な関係の何たるかを問い直し、先ず親の分、子の分を尽くすべきだ。そんな気がしてならない。

【次号最終回】